

厚生省科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業)
分担研究報告書

小児期からの総合的な健康づくりに関する研究
分担研究項目:小児期からの成人病予防に関する研究
分担研究者 福渡 靖 山野美容芸術短期大学教授

研究要旨:平成4年以来実施しているコーホート調査から、トラッキング効果、肥満防止のための生活習慣要因、肥満防止のための保健指導の方向を検討することを目的に解析を試みた。トラッキングについては、有阪、竹内、増田、岡田、森の各研究協力者が検討し、生活習慣については、福渡、北田が検討した。保健指導の方向については竹内が検討した。主な結果は、肥満防止の取り組みは幼児期から行うこと、その際には保護者を指導対象者として位置づけること、介入方法の再検討が必要なこと、が明らかとなった。

A. 研究目的

- 1.平成4年から行っている千葉県芝山町をはじめとする7地区に設定したコホート調査を継続実施し、その結果などから肥満他についてのトラッキングの検討を行う。
- 2.11年には第3回アンケート調査を行いこれまでの調査結果との比較検討を行う。
- 3.生活指導などの介入を行い、効果果的な肥満防止方法の検討する。

B. 研究方法

- 1.コホート調査の対象に、今までと同様のアンケート調査を実施した。
- 2.各研究協力者が肥満、コレステロール値、血圧等についてトラッキング現象を明らかにする。
- 3.生活習慣と肥満との関連を明らかにする。

C. 研究結果

- 1.コホート調査の実施。
千葉県芝山町、静岡県伊豆長岡町、静岡県磐田市、三重県河芸町、大阪府PL学園、大阪府森河内小及び東京都立川市の7地

区でアンケート等による調査を実施した。

2.トラッキングについて

各地区におけるコホート調査の結果から、トラッキングの検討を行った。

肥満については、有阪(芝山町:中1から20歳)、増田(河芸町:小1 小4,小4 中1,小1 中1)、岡田(大阪府PL学園)、が検討し、いずれもトラッキングを認めた。トータル・コレステロール(T-CHO)について、有阪、増田が検討し、強いトラッキングを認めた。

皮脂厚、HDL-C、LDL-C、等についても検討したが、肥満、T-CHOに比べるとその程度は低かった。

血圧については、トラッキングは低い結果であった。

トラッキングの検討方法について、森が相関係数、クインタイル図形による方法、トラッキング・インデックス(TI)を比較し、TIがもっとも効果的であることを示した。

4.肥満と生活習慣の関連

北田が、生活習慣と肥満の関連を検討し

た結果、早食い、運動嫌い、運動をあまりしない、野菜摂取が少ないとの関連が強く認められた。

このほか、体脂肪率、動脈硬化指数でも同様の生活習慣との関連が認められた。

3. 介入について

肥満児とその保護者を対象とした介入を、竹内が磐田市で実施した。介入方法の検討を行い、参加する親子は、受け身的な態度であるので、積極的に取り組むように工夫すること、養護教諭が、より主体的に取り組むように内容を再検討することが望ましいことが明らかとなった。

又、北田が、肥満児に介入しても、早食い、運動をあまりしない子どもでは肥満が持続することが明らかとなった。

D. 考察

1. トラッキング現象が、肥満、TI に強く見られることから、一旦、肥満になるとか、高コレステロール血症になるとかすると、改善が困難であると考えられる。肥満などが、幼児期からかなりの頻度で見られることから、岡田が指摘しているように、小児期、特に幼児期からの肥満防止が重要である。

この際、早食い、野菜摂取が少ないことについては、食事指導を親などの保護者に十分に行うことが大切であり、また、運動嫌い、運動をあまりしない等については、家族で体を動かす習慣の確立等を心がけることが重要であろう。

森が示したように、トラッキングの検討に、TI を用いることは検討に値するように考えられる。

2. また、介入方法の検討からも、竹内が指摘しているように保護者も含めて、積極的な取り組みがなかなか見られないことと、北田の指摘に見られるように、

に、生活習慣の改善が困難なことから、肥満児に対する介入については、動機付けの見直し、介入方法の再検討を行わないと、成果につながらないことが考えられる。相当の工夫と改良が必要であろう。

E. 結論

1. 肥満、コレステロールなどにトラッキングが強く見られることから、幼児期からの肥満防止への取り組みが大切である。

2. 幼児期における保健指導などの幼児機的生活への介入では、保護者と一体的に、むしろ保護者を主体的に対象とすることが重要である。

3. 肥満児への介入には、動機付けの見直し、介入方法の再検討が必要である。

4. 尚、第3回のアンケート調査結果と第2回までの結果の比較検討が本年は十分に行うことができなかつたので、12年度に行う予定である。

F. 研究発表

1. 有阪: 論文投稿

Oyama M., Arisaka O et al: The effect of growth hormone therapy on LDL particle size.

Clin Pediatric Endocrinol, in press

2. 増田: 平成 11 年度肥満学会発表